

論文の内容の要旨

論文題目 接続表現の多義性に関する日韓対照研究:neunde と kedo
を中心に

氏名 池 玫京

本研究は対応表現とされてきた現代韓国語の **neunde** と、日本語の **kedo** を取り上げ、両形式の使い分けと機能を考察した。従来の研究は **neunde** と **kedo** の用法分類を中心に行われてきたが、分類の基準が明確に示されておらず、分類の意義と分類間の関係が不明確であるという問題があった。そこで、本研究は **neunde** の考察を通して、一般性のある複文の分類基準を提示し、**neunde** の日本語対応表現とされる **kedo** や類似表現を対象に検証を行った。さらに、対象形式の用例をケース分けした結果から接続範囲を示すことによって、**neunde** と **kedo** の多義性が明らかになり、複文全体の中で位置づけられた。各章は以下のように構成されている。

第1章では、今までの主な研究の成果をまとめ、その問題点を確認した上で、本研究の目的を述べた。第2章では分析対象である **neunde** と **kedo** の形態的特徴をまとめ、分析方法と用例分析の際に確認する項目について考えてみた。**neunde** は述語の種類とテンスによって、**neunde**、**eunde**、及び **nde** という異形態が使い分けられる。また、**kedo** はケド、ケレド、ケレドモ、ケドモという形が存在し、**ga** との関係も問題になる。

第3章では **neunde** の用例分析から見いだされた、最も重要な要素を四項目取り上げ、その該当状況によって用例がいくつかのグループに分かれることを確認した。第一基準である「前提の有無」は、前件の内容から生じる、事態展開についての予想や期待、当為性などの存在で判断される。前提に一致する事態が後件に述べられていればケース1、一致せず食い違った事態であればケース2となる。一方、このような前提が見られない用例は、前後件の意味内容における対立で分かれる。前後件の意味内容に異質性が目立ち、互いに対立する場合は、ケース3となる。意

味内容に対立は見られないが、前件の命題内容が希薄化していればケース4、希薄でなければケース5になる。なお、これらの項目には上下関係や該当状況の含意が見られ、階層性が存在していることが分かった。分類基準によって分かれた用例のグループは、neunde が解釈される一つのパターンであると考えたため、名づけることはせず、ケースと呼んだ上で番号を付けた。これらの内容は以下の表のように示せる。

〔表1〕 分類基準の階層性とケース分け

分類基準						分類結果
前提	有	前提との一致	有			ケース1
			無			ケース2
	無	対立	有			ケース3
			無	前件命題の希薄化	有	ケース4
					無	ケース5

第4章では上記の分類基準で分けられた neunde の各ケースについて説明した。ケース1は前提に一致する事態が後件に接続されており、当為のモダリティや話し手の意志、聞き手への確認要求や命令、勧誘など、働きかけの表現が現れた。この特徴から、後件は未実現の事態であり、前件は後件事態の妥当性を主張するための理由・根拠になることが分かった。ケース2は前提に一致しない事態への驚きや不満、疑問形式による非難や反語の意味合いも現れた。一方、前提が存在しないケース3は前後件の叙述内容に対立が見られた。肯定と否定、対義語の羅列、変数の制限、及び取り立て助詞の使用によって、対比の意味合いを帯びる。ケース4は意味的対立は見られないが、前件は発話行為のリスクが高い後件に付けた注釈であり、発話行為領域における機能に不一致がある。ケース5はどの分類基準にも該当しないが、意味構造に特徴があり、前件で説明の対象を提示した上で、後件で説明を施す関係が見られた。

このように分類基準を明確に示すことによって、全ての用例を同じ条件で分析することが可能になり、各ケースを総合的に捉えることができた。また、neunde のケース分けは非常に多様で、他の接続表現に比べ多義的であることが分かった。ここまで多義性が高い接続表現の分類基準なら、対応表現とされる kedo や、類似表現の分析にも利用可能性があると見て、その一般性の検証を試みた。

第5章では、kedo を用いて分類基準を検証した。分析の結果、kedo はケース2から5まで存在し、接続可能な範囲が neunde と一致しないことが明らかになった。kedo にはケース1が存在せず、前提と一致する事態は接続できない。ケース2で食い違いがある事態の流れ、ケース3で叙述内容の異質性が見られた。ケース4は、発話のリスクが高い後件に付けた注釈として用いられたが、聞き手の認識状況への予想によってノダとの共起が見られた。さらに、ケース5の平叙文においてはノダとの共起が必須で、意味的に対立しない前後関係を kedo で結びつけるためには、ノダとの共起が必要であると考えられる。neunde においてはノダ相当形式である geosida

との共起は不可能であり、日韓の違いが見られる。以上、neunde と kedo の異同が明らかになり、本研究の分類基準は kedo の分類にも有効であることが分かった。

第6章では neunde と kedo の類似表現を取り上げ、分類基準の最終検証を行った。韓国語の jiman、日本語の ga と noni の用例分析を行った結果、これらの接続範囲は以下のように現れた。

〔表2〕 分類基準と各形式のケース分け

分類基準とケース分け					neunde	jiman	kedo	ga	noni	
前提	有	前提と の一致	有		ケース1	○				
			無		ケース2	○	○	○	○	○
	無	対立	有		ケース3	○	○	○	○	
			無	前件 希薄	有	ケース4	○	○	○	○
				無	ケース5	○		△	○	

neunde の類似表現である jiman は、ケース2から4まで存在し、neunde より接続する範囲が狭く、書きことばや格式ばった場面で使用される傾向があった。一方、日本語の kedo と ga はケース2から4までの範囲で共通に見られたが、ケース5においては相違点がある。特に平叙文の場合、ケース5の kedo はノダとの共起が必要な反面、ga においてはノダとの共起があまり見られず、単独でケース2から5までを接続できる。また、noni はケース2と3で見られ、何らかの不一致がある前後件関係を結ぶことが分かった。以上の考察で、四項目の分類基準が neunde と kedo 以外の接続表現の分析にも有効であることが、再び確認された。しかし、なぜ同じ形式でここまで広範囲の接続ができるかについては疑問が残り、各ケースの事態の流れから関連性を考えてみた。

第7章では、本研究で取り上げた韓国語の neunde、jiman、日本語の kedo、ga、noni のケース分けを、事態の流れという観点から捉えてみた。その内容は下のようにまとめられる。

〔表3〕 各形式のケース分けと事態の流れ

ケース分け	事態の流れ	neunde	jiman	kedo	ga	noni
ケース2	-					
ケース3						
ケース4						
ケース5	0					
ケース1	+					

接続できる範囲の広さは neunde > ga > kedo > jiman > noni の順であり、ケース2から4までは前提と食い違った結果、前後件内容や発話機能における対立など、何らかの不一致が見られる。

この前後件の関係は相反する流れ、即ち「-」の流れであると言える。反対に、前提に一致した後件事態が現れるケース1は同じ流れ、即ち「+」の流れであり、不一致や相乗関係が見られないケース5は「0」の流れであると考えられる。この事態の流れで各形式の接続範囲を捉えてみると、neundeは「-~0~+」、gaは「-~0」、jimanとnoniは「-」の領域を接続することが分かる。kedoは「-」の領域を基本とするが、ノダが共起すれば「0」の事態関係も結ぶことができる。しかし、同じ「-」領域の接続と言っても、noniは意味論レベルに限られており、他の四形式のように語用論レベルの不一致を結びつけることはできない。

このように、接続範囲が広く、多様な使い分けがある接続表現については、全てを統括する機能を提示する必要がある。そのためには、複文内における機能と、実際の解釈を区別しなければならない。そこで、本研究ではneundeは特定の事態の流れを指示せず、前後件の関連性を保証する程度の抽象的な機能を持つため、解釈が多義的であると提案した。一方、相反する事態の流れのみ接続するkedoとjiman、及びnoniの機能は不一致の結びつきであり、kedoはノダを伴うことで「-」の流れが解除され、「0」の事態関係まで接続することになる。最後に、gaは「+」の流れの排除として考えられる。これらの接続表現は、ケース分けなどの表面的な解釈においては類似点が多いが、お互い異なる機能を持って複文を構成することが分かった。

今回は分類基準を設けて分析を進めることによって、全ての用例を同じ条件で分析することができた。これは研究者の主観の介入を抑える装置でもあり、分析結果の妥当性を裏付ける根拠である。この分類基準はneunde以外にも日本語のkedoや、類似表現jiman、ga、noniの分析において有効で、接続範囲の異同を明らかにする。今後他の接続表現の分析と位置づけにも活用が期待され、複文分析の枠組みを提案したことに意義がある。とはいえ、不十分な点もあり、未だ課題が多く残されている。第一に、使い分けと接続範囲における拡張の方向や順序は今後考察すべき点である。第二に、接続表現の多義性について、より多くの形式を対象に実態を調べてみる必要がある。多義的接続表現と一義的接続表現の解釈課程が明確に示されれば、それぞれの仕組みがより深く理解できると思われる。第三に、言いさしや終助詞化、終結語尾化と呼ばれる現象を調べ、接続助詞、接続語尾としての使い方との関係、文法化について説明することが求められる。最後に、外国語教育における具体的な活用方法を提示する必要がある。このような問題点を解決するために、今後も様々な接続表現の記述と分析に努めていきたいと考えている。